



発行日 \*\*\*2009年1月1日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp

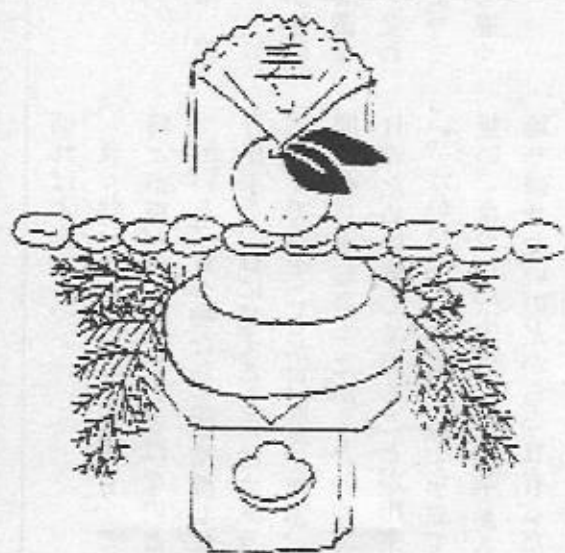
皆様からの投稿をお待ちしております

http://www.justmystage.com/home/akutagawa/

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*



## 新年の風

昔の田舎では盆と正月は特別な日であった。

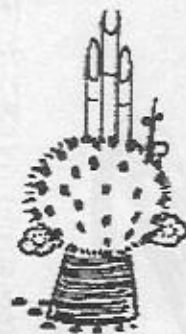
着る物にしても食べ物にしても、この日を目がけて用意したものだ。幼心にも待ちどうしかったが、その中でも正月は神聖な神々が家の中にも外の庭木にも水屋の酌までも宿っている事を感じさせた。盆が先祖の霊を迎え供養するように死者が介在するのに対して、正月は人以外の八百万の神を祀り感謝する。庭の松の木の根本には前栽の神を奉る正月飾りを置く。水場の酌も清める為に水引で結びつける。土蔵の入口の柱までも裏白の飾りを取り付けてあった。

夏と異なる冬の季節感が盆と正月の違いを際立たせているのだが、仏様と神様の違いこそが根底にあり風情を変えているのだと思う。

元旦の朝、氏神様に参る時に感じる空気は大晦日のそれではない。一日の違いで全く新しい匂いを感じる風が吹く。山や田の神々をおそれ敬い災害を治め、五穀豊穡を願う人々の想いが様々な飾りを創造させた。その象徴が氏神様である。村の中ほどに位置し、村の家々を見渡せる高台の杉木立に守られるように建っていた。自然林の杉が古からの長い悠久の時を感じさせ、草むらに敷かれた石段が枯れた杉の葉で隠れている景色は雪が積もっていてもいなくても十分に神々しい。境内の社の虫食われた白木の柱にも飾りが無い故に一層自然な時と神を観るようだった。

あの時の情景は、雪が降っていても曇り空でみぞれであっても正月であった。新しい言いようのない神秘的な直感が観えざる神々が宿るとされる身の回りのものに触発されて、心の怠惰なものを刺激した。その一瞬、己の中に神の風が吹き抜けていくように感じた。今年の神風が私の心にある邪念を一掃するように流れてくれるように願う。

頭を垂れ祭壇の奥の鏡に今年の願いを祈る心は昔からの人の仕草である。(嘉)



\*\*\* 花嫁暖簾 \*\*\*

『暖簾のように従順であるように』という女性としての在り方を表わして、嫁ぐ娘の幸せを願い、作る加賀友禅の花嫁暖簾。家紋を白く染め抜き、花鳥風月を加賀五彩で染めた三連・五連の暖簾です。

白無垢の花嫁さんは、嫁ぎ先の仏間の入口に下げられた暖簾をくぐり、お仏壇にお参りするのです。『嫁は従順に』という感覚は現代にはなくなっているようですが、この花嫁暖簾は今も金沢に続いている風習です。

花嫁暖簾が目には艶やかな婚禮の当日、玄関先には『五色饅頭』が詰められた塗りの家紋入りの木箱が何箱も積み上がり、その木箱の数で婚禮の規模を知る事が出来ました。花嫁さんを見に来てくれた近所の方や親戚筋に配ります。子供達は太陽・月・豊穡・紅・白の五種類の生暖かい饅頭を半紙に包むのを手伝わされたものです。

仏間の床の間には見事な水引きで飾られた結納の品々が並べられ、圧巻で、縁側には花嫁さんのお道具が並んでいます。加賀友禅の黒留を着た大人が花嫁さんが到着する時間を気にし目の前を慌ただしく行き来します。それは華やかな時間で、あの空間を今でもなぜか思い出します。

絹擦れの音と金沢弁とあの友禅の色と共に、幸せな思い出として・・・

立木 理

いつものように年が明けた。何か区切りをつけようと思つてしまふ不思議な瞬間だ。数日もすれば普段に戻り、変わることはない日常が続くに決まっているが、それでもこの日だけは少し違つた気分になれる。それが元日。

過去と未来の分かれ目のようだ。過去という流れと未来という流れが接触する瞬間のようだ。この瞬間に上手く未来の流れに乗り換えなければならぬ。下手をするとまた一年待つことになる。時の流れは一つだが、我々の心の有り様からすると過去と未来は連続しているようで非連続、全く異なる流れと思われ

幾度か経験したことが、困難な事態や窮地に追い込まれ、もうどうすることも出来なくなった時、何故か突然に飛躍が生まれ、その連続を断ち切り新たな流れに乗り移ることが出来た。説明できないから飛躍としか言いようがない。

生と死もまた実は非連続なものなのだろう。ある瞬間に「こちら」から「こちら」へ飛び越えてしまふ。この飛び越えは、自分の意思とは関係なくやってくるのだからその一瞬までこの生を使い

切ればよからう。

我々はその時間の中に在り、この時々が再び戻り来ることはないを知っている。食べ物なら大概冷凍して保存出来る。目に見えるものはカメラやビデオで残すことが可能だ。だが、時間は今日少し余つたからといって明日のために残しておくことが出来ない。分かつていても繰り越す手立てが無い。まったく不自由な代物である。繰り越せないのだから今日有るだけ

を上手く使い切ればよいのだが、これもまた中々難しい。時間に限らず目に見えないものの扱いは厄介である。日々様々な感情や思いが交錯する。愛を覚えたり憎しみを感じたり、欲望を抱いたり妬みを受けたり、悲しんだり浮き浮きしたりと結構忙しい。忙しくしているうちにどんどん過ぎて行く。

不図振り返るとそこに何も残っていないと気付く。この一年は何だったのだろう、これまでの時間は何だったのか、ついつい否定的に観てしまうのが多くの常ではなからうか。

他人から見れば随分無駄と思われることをして来たし未だにそうだ。ところがその無駄なものこそが強い印象、強い記憶、生きている化石となつて「戻つて来ない時間」を蘇生させてくれる。合理的・有益的に時間を使うことは大切

な事だが、反面そればかりだと味気ない無味乾燥なものとなりはしないだろうか。人の目に無駄と映つたものには、自分にとつては取り替えることの出来ない想いが残存している。人生がいっぱい詰まっている。それこそが私の生きてきた証拠でもある。時間は取り戻せないから無駄にしてはいけませんと伝えるより、無駄こそが豊かな人生を築くと伝えるほうが正しい様に思えて仕方がない。

刻々と死に向かつて進んでいる。刻々と後戻りのない時間が流れている。皆この一本のレールの上を走っている。他にレールはない。終着駅も一つである。ならば真直ぐ走るより蛇行して多くの景色を見るほうが楽しいではないか。急いで早く着くよりゆっくり着けばよい。ゆっくり走れば良く観える。回り道大いに結構と今のままを続けることだろう。

如何様に過ごそうとも自分の意思とは関係なく、連続性を断ち切る「突然の飛躍」がやってくる。それは自身の潮流が変わることだ。過去から離れるためにやってくる。未来を開くためにやってくる。死も同様だろう、ただ自覚出来ないだけのこと（と想像する）。



クイズ

將軍足利義昭と芥川城主和田惟政

福嶋 努

一五六八年（永祿十一年）九月下旬に、織田信長は、先に、松永久秀・彈正・三好三人衆によつて暗殺された十三代將軍足利義輝の弟義昭を擁立して上洛。ただちに摂津方面への進撃を開始。三好三人衆の一人岩城友通の居城である勝龍寺城を陥落させたあと、一番の目的であった摂津の国の芥川城を落とし、芥川入城を果たし終えました。

「戦うこと風の発するが如く、攻むること河の決するが如し」（信長公記）の信長軍のすごい勢いに圧倒されて、高槻城主の入江春景をはじめ畿内各地の勢力者が、戦うことなく次々と芥川城へやってくる。義昭・信長に平伏・降伏をするのでした。池田城主の池田勝正は、自ら人質を連れてきて平伏し、畿内の実力者松永久秀・彈正は、日本に二つとない茶碗「つくもがみ」を進呈、堺の豪商今井宗久は、名器茶壺「松島の壺」を献上して恭順の意を示したという事です。そして、それぞれのもとの地位・所領をあらためて認められました。

こうして、ほんの二・三日で義昭・へ



信長は、五畿内すべてを制圧したのでした。約一ヶ月の畿内滞在期間のうち二週間は、芥川城に拠点を置き、畿内の新しい枠組み・体制を示し整えたのでした。

幕府用人の武将和田惟政は、摂津守護に任ぜられ、芥川城主となり、北摂を支配することになりました。この地方は、京都への道筋としてとても重要な地域でありましたから、将軍義昭は、絶大の信頼を寄せている和田惟政を起用したのでした。

惟政は、将軍家の伝統を大切に考えていた武將で、すでに力を失っていた将軍家とはいえ、これを絶やす訳にはいかないと思い定めており、惟政自身の郷土である近江の国甲賀油日に匿っていた足利義昭を、信長などの協力を得て十五代将軍の座につかせた立役者の一人でした。

のちに天下人となる信長としては、義昭を擁立することで、全国統一の自分の野望を現実のものにする道程を一歩踏み出すことになったのでした。

一五六九年（永禄十二年）一月、三好三人衆が京都を奪いかえそうとして、将軍義昭の居所であった六条本願寺を攻めました。その時、高槻城主の入江春景は、前の年に義昭・信長に降伏して、もとの地位を認められていたにもかかわらず、三好三人衆に味方して、

西国街道封鎖という行動に出ました。

そのため、将軍義昭を援けようとした池田勝正・伊丹忠親などの摂津の武將の軍は、西国街道を利用できず、やっかない山越えで京都へ向かわざるを得なくなっていました。

この年の四月、入江春景は、和田惟政に誅殺されてしまいます。（誅殺とは、罪のあるものを殺すことをいいます。）

一三三七年（延元二年）に「①」の命を受けて、入江春則が高槻城主になつて以来、二百三十年間十二代にまたがって代々の城主を継承してきた名家入江氏も、ここに滅んでしまいました。この後の高槻城主には、芥川城主の和田惟政が就任しました。そして、芥川城は、惟政の家臣、高山飛騨守・右近父子に預けることになりました。

（問）文章の中の「①」に当てはまる言葉を次のア・イ・ウから一つ選んで下さい。

- ア、足利尊氏      イ、足利義満  
ウ、足利義政



☆「芥川だより」二十八号のクイズの答は（ウ、京都）でした。

### 死は理不尽なものか

昨日（十二月二十八日）、イスラエルがガザのハマス関連施設を空爆して、一五五人が死亡したと共同通信が伝えた。さらに死者の数は増えるだろう。第一次インテイクファード以降最悪の規模だという。

イラク戦争が二〇〇三年三月に始まってから、アメリカ兵の死者数を共同通信はカウントしているが、十二月二十七日現在で四二一七人である。イラク人にいたっては、公式な記録はないが、NGOなどのカウントによると一二万とも一五万ともいわれる。

「百人の死は悲劇だが、百万人の死は統計だ」といったのはアイヒマンだが、シベリア抑留経験のある詩人石原吉郎は「死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである」と。数値の連続性があるだけで、一人一人の死がないからだ。

ナチのホロコーストやスターリンの粛正による何百万人、何千万人の死にせよ、空爆やテロによるイラク市民の十数万の死にせよ、ひとつひとつの生命の尊厳が粉砕されたものだ。

石原吉郎はシベリアでさまざまな死に出会う。その経験をもとに次のようにいう。

「人間は死んではならない。死は、人間の側からは、あくまで理不尽なものであり、ありうべからざるものであり、絶対に起つてはならないものである。そういう認識は、死を一般の承認の場から、単独な一個の死体、一人の具体的な死者の名へ一挙に引きもどすときに、はじめて成立するのであり、そのような認識が成立しない場所では、死についての、同時に生についてのどのような発言も成立しない。死がありうべからざる、理不尽なことであればこそ、どのような大量の殺戮のなかからでも、一人の例外的な死者を掘りおこさなければならぬのである。大量殺戮を量の恐怖としてのみ理解するなら、問題のもつとも切実な視点は即座に脱落するだろう」（『確認されない死のなかで』）

もう一人、母に寄り添いその死を看とつたポーヴオワールの言葉にも耳をかたむけてみたい。

「ひとは生まれたから死ぬのでもなく、生き終わったから、年をとったから死ぬのでもない。ひとは何かで死ぬ。——自然死は存在しない。人間の身に起こるいかなることも自然ではない。彼の現実的存在が初めて世界を問題にするのだから。ひとは死すべきもの。しかし、ひとりひとりの人間にとって、その死は事故である。たとえ、彼がそれを知り、それに同意を与えていても、それは不当な暴力である」（『おだやかな死』）

## 冬の槍ヶ岳3

梵店主

小屋の板間に張ったテントの中での寝心地は良くはなかったが、テントが風で吹き飛ばされぬ不安感でよっちゃんには幾分寝れたような気がした。

冬の穂高の稜線は、凍結した雪原と岩が織りなす別世界である。ガスと風が突然沸き起こって、行く手を阻む。

よっちゃんは、夜明けが待ち遠しかった。外の風は止んでいり。トイレに起きた時は星が見えた。気温も下がっていた。天気図からも今日の天気は持つはずだ。冬山で、快晴を期待するのは難しい。天気が良ければ登山は安易になる。

よっちゃんは、今日中に槍ヶ岳を登って小屋に帰ってくる計画を考えた。下級生が多く上級生が少ないので、パーティーを分けることは不測の事態に対処する力を分散するから全員で行動する判断をした。

五時からエッセンを始め、六時過ぎには、全員冬山の完全装備を身に付けて外に出た。テントは撤収して小屋の隅にデポした。各自が持っているものは、非常装備とザイルなどで軽い。

風のない稜線は、さほど寒くない。静かな薄闇が拡がっていた。

日の出までは、ヘッドランプをつけて歩く。雪と星のほのかな光で普通に歩ける。

休みなく歩いて槍の肩の小屋に九時過ぎに着いた。太陽がまぶしい。風がない。今日は快晴である。ドスカ天だ！

よっちゃんは、エビの尻尾のように雪が岩肌についた槍の穂先につづく岩の壁を見て、積雪が少ない事を確認して安堵した。「これなら、持ってきた三本のザイルを固定すれば登れる。天気が崩れないうちに登って降りてこよう」と即断した。

槍の穂先までは距離にして三百メートル。ルートの上部の平均斜度は五十度を超える。その為、ハシゴと岩に打たれた鉄杭を支えにして登らなければならぬが、そのルートは大半が雪と氷が覆っているので厄介だ。

ルート全部に固定ロープを張りたいたいぐらいだが無理なので、とりわけ難しい箇所だけ張る。それ以外の箇所の通過を安全にするために、三人をザイルで繋いで登る。スリッパして滑落しても繋いだザイルで止める為であるが、下手をすれば巻き込まれるので非常に緊張する。

よっちゃんと二年生が先行してルート工作する。誰も先行した様子はない。夏道に沿って高度を上げ、三本の四十分メートルザイルもハーケンを岩に打ち

込んだりして固定した。

よっちゃんは頂上まで登り、心配した頂上も積雪が少なく畳二枚ほどのスペースがあったので、トランシーバーで後発隊に連絡した。

一年生を全員登らせるという目標を確実にするために、よっちゃんと二年生は一年生をサポートしなければならぬので休む間もなく頂を後にして下った。固定ロープを利用して走るように降った。

初めての経験である一年生の冬の槍ヶ岳の登頂を事故がないように、上級生達は懸命にサポートをする。アイゼンの爪の先が岩面を踏む際に滑ったり、引掛たりする可能性が高い。滑り始めたらずくに捕まえて止めなければいけない。少しでもスピードが出てしまつたら止められない。

上級生は命がけて一年生を守る。それは部の伝統でもあるのだが、もしも事故を起こせば先輩達から大変な非難を受ける。山友達が一生付き合うのは、互いに命をかけたギリギリの極限を幾度も共に経験しているからだ。

好天気のおかげで、よっちゃん達は無事肩の小屋まで降りてこれた。さあ、今回の合宿目標を達成出来たわけだからみんなの気分も良い。

「さあ一気に南岳の小屋まで飛ばそう」と言って小走りに稜線を南に向かつて駆け出した。担いでいる荷もアタックザックだけだから軽い。アイゼンが堅雪に気持ちよくくい込む。

休み無しで南岳まで来た。みんなの調子が良さそうなのでベースのある槍平まで飛ばす事にする。固定ロープは翌日取りに来る事にして、天気なので雪崩には気をつけて降る。槍平のテントに日暮れ前に全員着いた。

その晩は、少し遅い夕食になったがいつものように、食料を軽くするためにたらふく食べて寝た。明日一日はザイルなどの回収で槍平のテントだが、明後日は新穂高で温泉に浸かれる。よっちゃんが心配から解放される瞬間はもうすぐだ。





科野 山猿

長いあいだ休載していた「エヴェレスト」という山の連載を再開します。「芥川だより」というミニコミ誌には内容がそぐわないのではないかと懸念があったので、6号から連載を「介護日誌」に変更したのですが、その介護日誌の連載も終わり、新連載を考えていたところ、投げだしたままであった「エヴェレスト」という山に思いがいたりしました。このまま中途半端に置いておくよりは、エヴェレストをめぐって登山がどのように展開されたのかということをおわかりやすく書き綴るのもいいのではないかと、読んでくださる読者もおられるだろうと思いを直したわけです。第一回は「エヴェレスト」という山名について、二回はチベット人の山との関係性についてふれました。今回は近代登山の成り立ちを簡単に解説して、「エヴェレスト」の登山に話を進めていきたいと思います。

五号で、山には神々が住んでいるというチベット人の山との関係性についてお話ししましたが、山にたいする態度はそれぞれの国というか、文化圏によって異なります。

日本では、山は死者の霊がおもむくところであったり、神々が降臨するところであり、神聖な場所でした。また、七世紀には仏教が浸透する中で、神仏習合の山岳修験者が出現します。山に登ることを信仰の中心におくんですね。山の霊気をもったり、新たに再

生するため山に入っていくたわけです。日本の山は独特で、ヒマラヤのような高山はありませんし、ヨーロッパ・アルプスのような岩と雪の山は中部山岳地帯の一部に限られます。ほとんどが森に覆われた、人々の生活に近いところにある山です。そういう山にいます神を、社や祠をつくって祀るんです。江戸時代の太平の世になると、霊山を遙拝したり、さらに登拝するようになります。

チベットの山も神々が住む聖なるところですが、日本のように山の神を祀ったり、遙拝とか登拝をするという習俗はありません。

ヨーロッパでは、十七、八世紀までは悪魔のすみかでした。山の風景を語るとき、怪物のようなものとか、気味の悪いもの、見るも恐ろしいものというのが決まり文句だった。山は地上の醜いこぶか、火ぶくれのように思っていたわけですね。自然界で山がもっとも醜いものだったのです。

ところが、十九世紀になると、山にたいする価値観が逆転します。山は美しいと認識されるようになるんです。それは、山の美しさを謳ったワーズワースやバイロン、ゲーテ、ハイネといった文人たちの影響があります。決定的な影響を与えたのはジョン・ラスキンです。彼らに啓発された人々が山へ

の関心を深めていったんです。このころからアルプスの山々が登られはじめるのです。

そして、十九世紀の半ばにアルプスに登場した英国人によって近代登山が開花する。登山がスポーツとして組織されるのです。ちょうど「エヴェレスト」が最高峰として発見されたころですね。英国にアルパイン・クラブが設立されるのは一八五七年です。

十八世紀後半にいくつかの先駆的な登山はありました。パツカールとバルマがアルプス最高峰モンブランに登った登山(一七八六年)もその一つです。この時代のパイオニアの多くは僧侶です。代表的な人はブラズドウス・スペシアというスイスの聖職者で、「真の登山家に値する最初の人」と称えられています。

近代登山のはじまりには山岳美の発見とその普及が背景にあります。やはり山に入るためにはそこに住む神や悪魔を追い払う必要があります。これは桑原武夫さんの指摘です。山にまとわりついた神秘性をはぎとって、山がたんなる岩と氷のかたまり、すなわち物質になる必要があった。そのために重要な役割を果たしたのがプロテスタンティズムだということです。キリスト教から神秘的要素を消し去ったからです。チベット人が

エヴェレスト「すなわちチョモカンガルに登るためには、この山に住むツェリンチェーガという五人姉妹の女神を追い出さなければならぬわけだ」。

それと併行してアルピニズムの指導精神となつたのが近代自然科学だと桑原さんはいいます。たしかにアルプスに分け入った先達は科学者です。未知を探究し、発見によって得られたデータを蓄積して、また新たな未踏の地に足を踏み入れていく、そういう科学精神は近代登山の精神とあい通じるといってわけですね。

十九世紀に始まる近代登山の最初の時代は「黄金時代」と呼ばれます。アルプスの秘密が解き明かされ、主だった未踏の高峰が登られた探検登山の時代です。黄金時代に終焉を告げる登山が、一八六五年のウインパーによるマッターホルン登頂です。ちょうど「エヴェレスト」の標高が八八四〇メートルと算定された年です。

次の時代は「銀の時代」といって、パリエーション・ルートが開拓された。冬山登山や単独登山、ガイドレス登山も行われるようになります。アルプスの主役は次第に、英国人からドイツやオーストリアなどの大陸の登山家に移っていきます。

いっぽう英国人は、カフカズやヒマラヤ、アンデスへと活動範囲を海外に広げていく。十九世紀のおわりごろになって、ヒマラヤの高峰を目ざして登山が試みられるようになるのです。

あなたの街の電気屋さん

ダイコク電化 山川 修

### ◆ぼかぼか冬支度

・朝夕の寒さが気になりだしたら、そろそろおうちの冬支度を始めましょう。暖房機のお手入れ、結露防止対策など、冬を暖かく快適に過ごすためのポイントをご紹介します。



### ■暖房器具をお手入れしましょう!

・暖房器具を省エネかつ安全に使用するために、きちんとお手入れすることが大事です。

効率的に部屋を暖めるために、使用方法や設置場所も考えましょう。

### ◆エアコン

・エアコンフィルターにはホコリやチリ、カビの胞子などがたまっており、汚れたままで使用すると、これらの汚れが室内に循環し、体に悪影響を与え

ることもあります。使用前にお手入れしておくことが健康のためにも大切です。お手入れは本体の電源を抜き、フィルターを外して掃除機でホコリを吸い取り、汚れがひどい場合は水洗いしましょう。エアコン内部の細かい部分は、私共電気屋に御一報を!

### ◆電気ホットカーペット

・フローリングで使用すると、熱を取られて暖房効率が悪くなるので、ホットカーペットの下に敷物やマットを敷きます。エアコンを使ったり、ひざ掛けや少し厚着をすると、低い温度設定でも暖かく感じられますよ。

### ◆石油ストーブ

・乾電池式の残量チェック、耐震自動消化装置のテストをしてから使います。

・器具についたホコリはよく絞った柔らかい布でふき取ります。灯油はしまう前に使い切るのが基本ですが、本体に古い灯油が残っている場合は、拭き取って処理しましょう。

### ◆ファンヒーター

・器具本体や温風吹出口についたホコリなどは掃除機で吸い取り、油や汚れなどは、よく絞った柔らかい布で拭き取ります。

※いずれの暖房器具も、取り扱い説明書をよく読んで、お手入れしてくださいね。

### ■結露対策をしましょう!

・冬場は暖房器具を使用するため、温度差が大きくなり、窓ガラスなどに結露がでやすくなります。結露は放置しておくとなやカビが発生しやすくなり、アレルギーなどの原因にもなりますので、しっかりと予防&対策をしましょう。

### ◆家具は壁から少し離す

・家具やソファを壁際に置いていると、部屋の暖かい空気が家具で遮られ、家具の裏側が冷えて結露が発生します。壁から5cmほど離して置くのがコツです。

### ◆発生した水滴を除去

・発生した結露をすぐに吸収するために、新聞紙などを丸め、窓枠の隙間に詰めておきます。窓枠に貼るタイプの給水シートも市販されています。

### ■カーテンで暖房効率を高めましょう!

う!

・部屋を暖かく保つためには、暖房器具ばかりに頼るのではなく、カーテンを工夫しましょう。素材や取り付け次第で部屋の熱を逃がさず、暖房効果が高まります。

### ◆素材を選ぶ

・密度を詰めて織られた重くて厚さの

### ◆つり方を工夫する

・丈を長めにして、腰の高さの窓でも床までカーテンで覆うと保温効果が高まります。

### ◆二重にする

・レースカーテンで二重吊りにしたり、裏地を付けたたり、ヒダをたくさんとるようにすると、空気の層が増え保温効果が高まります。

以上のように、今年の冬は寒くなりそうなので、皆さんちよつとした工夫で、暖かく過ごせて、電気代の節約になるかもしれません。一度お試しください。

最後にちよつと宣伝ですが、エアコンは「夏」だけの商品ではありません! 「冬」こそエアコンをお使いください。安全で、最近のエアコンはエコ設計になっていますので電気代も節約できますよ! エアコン+加湿器を使うとさらに1℃~2℃設定温度を下げても快適に使用できます。(部屋の湿度を上げると、体感温度もUPします)

是非、エアコンを見直して、暖かい冬をお過ごし下さい。

今年も、皆様にお役に立つ情報をお伝えしてまいります。よろしくお願ひ致します。



東京と違って田舎の生活は不便の多い毎日でした。一年ほどたつころには、姑に助けていただいたお蔭もあって田舎生活にも慣れ、手や足が大分たくましくなりました。赤ちゃんには、私がしぼりだすお乳だけでは足りず、カンテキで湯を沸かしミルクを作ったり、おも湯を与えたりしました。赤ちゃんも私も生きるのに一生懸命の時代、無我夢中で育児をしました。

第一子の名前については、女子でも男子でも最初の子の名は「貞香<sup>さだか</sup>」にして欲しい、という亡き父の遺言がありました。母も父の生前の希望がかなうことを願って、この家にとって大切な長男である孫にどうしても、というたつての頼みでした。それで主人と私は、是非もなく長男に「貞香」という女の子のような名前をつけたのです。

母は貞香をたいへん可愛がってくれました。私は母乳の出が悪くミルクをよくつくったのですが、そんなときは、母の、まだまだ魅力的な大きな乳房に助けられました。乳が出ることはないのですが、赤ちゃんには吸いやすかったようです。ミルクが出来るまでの間「はい。おかあさん」と言っ、子供を母に渡して面倒を見てもらった

ものです。私の子か、母の子かわからないくらい、貞香は母の乳房のお世話になったのです。

夜、母は独りで寝るのを淋しがり、私の隣に布団を敷いて休むことがたびたびありました。そんなとき赤ちゃんが泣き出すと、「早くミルクを作っていらつしやい」といって泣く子をあやしてくれるのです。赤ちゃんの面倒をほんとうによく見てくれて、大変助かりました。

翌年の夏、二人目の赤ちゃんが宿っている気配を身体に感じたのです。さつそく産院で診てもらうと、早や四カ月目にかかっていた。予定は三月の中ごろと言われました。帰宅して母に報告すると、大喜びして「大事にして頂戴ね」とニコニコして私の手を握ってくださいました。

ちょうどその頃、東京に勤めていた弟が、大阪で開局されたばかりの毎日放送の入社試験に受かって、入局したのです。弟は家から通うことになり、一人増えて家中がにわか賑やかになりました。時を同じくして、縁談話もちあがっていました。

その頃の貞香君は、ハイハイからツタイ歩きができるまでに成長して、私は目が離せません。ちよつと目を離すとハイハイの中間のまま縁から土間へ落ちそうになるのです。紐で貞香をゆ

わえて、一方の端を柱に括り付けて落ちないようにしました。土間で洗濯をしていると、貞香が紐いっぱいまでハイハイしてきて泣く始末。母乳が足りなくてガリガリに痩せていた頃はおとなしかったのですが、栄養が十分に摂れるようになると、太って元気に動き回るようになります。そんなわが子の世話をしなから家事をこなすという、そんなしんどい一日、一日がまたたく間に過ぎてゆきました。

忙しい日常に追われていたとき、法務を一手に引き受けてくれた小僧さんから、大学へ進学したい申し出があったのです。法務というのは、檀家さんの法事などに出かけて行ってお経を読んだり法話をしたりするお勤めです。それで、その法務の役割を誰が担うかという問題が起きました。

檀家総代と相談したところ、「若奥さんは真宗系の女学校を卒業してると聞いているから、法務を担当してもらったら」という提案がありました。私は「本山へ暫く修行に行かなくてはいけないのでは？」と尋ねたところ、「身体のこと、幼いお子さんのことなど色々な事情を考えれば、今は本山での修行は無理でしょう。子供衆が大きくなって留守番ができるようになってからでもいいのではないか」という意見もありました。

「若奥さんがお参りして下されば、門徒はこの上なく嬉しい」というご希望が多く、けつきよく私が法務をつとめることになったのです。さつそく白衣と黒衣を用意して、檀家さんをお参りすることにしました。白衣のうえから黒衣をかきね着た姿は、まあまあ様になつているじゃん、と思いました。お姑さんも「あら、よく似合うじゃないの」と前から後から見ながら「まあ、八十点あげるわ」とのこと。百点はつけてもらえませんでした。まあ及第点だからいいじゃない、と思いました。

いよいよ初めてのお勤めの日を迎えます。母から「お勤めは阿弥陀経でね」と言われました。浄土三部経の中でいちばん短いお経ですが、早く唱えても十五分はかかります。

「あなた、長い時間坐れるの？」と母。「はい。お茶やお花を習っていたから大丈夫です」と緊張して答える私。「今日は一軒だからね。ゆつくり勤めて三十分くらい頑張つて参つてらつしやい」と見送る母。「はい！ では行ってまいります」と私は出かけました。初めて訪ねたお家では、とても優しい奥様が迎えてくださいました。ご挨拶して仏壇を開き、初めてのお勤めです。阿弥陀経を唱えはじめると、不思議にスラスラと自然に声が出て、我ながら感心しました。お勤めは三十分、

ほどで終わりました。それから南無阿彌陀仏のお念仏を称えながら仏壇の扉を閉めます。しばらく奥様とお話をし、退出の御挨拶をして失礼しました。

初めての法務を無事に終えて、私はほっとして帰路につきました。寺に帰って、心配して留守番していた母に報告すると、胸をなでおろしたような様子です。貞香君がお利口さんに寝ている姿を見て、お世話いただいた母にお礼を言いました。

お寺でいちばん大事なことは、やはり教化です。何気なしに役員さんから声がかかると、私は素直に檀家さんのお家へ法務を勤めに参ります。お経をあげ、仏さまの教えやお念仏についての話をしたり、世間話で興に入ったり、そういう檀家さんとの触れ合いが教化につながるのではないかと思っています。法務のお勤めは、私にとって楽しみになっていたのです。

それから五十年あまり、長い歲月、雨の日も風の日もニコニコと笑顔を絶やさずお勤めがつづけられたのは、檀家さんたちとお会いしてお話をするのが楽しいと感じているからでしょう。振り返ってみれば色々な事があったけれど、我ながら、ほんとうによくまあこんなに長く……と、しみじみと感じられます。あのときの法務は貴重な経験の第一歩でした。

### サラリーマン・エッセイ⑩

#### 良き死とは

明石 幸次郎

昨年(平成二十年)を象徴する漢字として「変」が選ばれて、毎年の恒例行事として清水寺貫主が奥の院の舞台上で揮毫されました。一昨年、選ばれた漢字は「偽」でしたが、昨年引き続き多くの「偽」が横行し、この漢字も色あせませんでした。

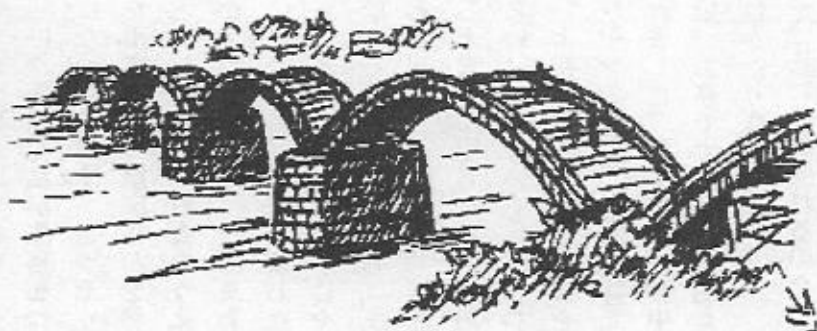
選ばれた漢字の「変」は私たちの暮らしの中で多く現れてきています。昨年九月に現れたサブプライム問題が世界の金融システムを「激変」させ、その影響で世界経済に変化(悪化)をもたせています。政府は百年に一度の経済危機で「大変」だと国民に訴え、景気対策を打ち出そうとしています。どう見ても麻生首相は景気対策、国民生活より政局を優先させ、自身の爺さんに恥じないように?少しでも政権を長らえさすことに苦慮しています。当に政変を恐れ、経済危機を逆手に取り、国民に政変の不安を煽り、総選挙に有利な状況を下手法ブフォーマンズで作り出そうとしています。

市井の我々国民を守ってくれないこと「変化」がはっきりとした節目の年でありました。時代が変わる時はその時代の象徴的な「変」な人物が出てくるのでしょうか。

「自分が客観的に分かる、あなたと違う!」と記者会見で捨て台詞を言っ、洞爺湖サミットが終わった途端に突然に政権を投げ出した福田前首相などはそうです。この人は元サラリーマンらしく、何処にでもいる、外見だけはスマートな大企業の営業部長(役員ではない)のようで、本質的な信念がなく、

言い逃ればかりが上手く自民党および党員に対する責任感も、決してや一番大事な国民に対する責任感も何も無い。あるのは自分だけが大事で、自負心と自我だけが強くて、何よりも政治家として大事な国民、国家に対する使命感も指導者としての矜持、犠牲的精神の欠片も何もない。プライドと自己愛だけが異常に強く、恥をかくことを極端に嫌い、自分から泥を被ぶることは絶対にせず、努力をして何かを成すというエネルギーと個性がない今時の若者と何ら変わらない人物ではないでしょうか。(安部、麻生も同類ですが)客観的に自分が分かっている、肝心の国民が客観的に何を政治に望んでいるかが分からないひ弱な二世議員の典型です。このような指導者を安部、福

田に継いで三代も持たねばならない我々、国民こそ何よりも不幸なことは、客観的に?間違いはありません。百年に一度の未曾有の経済危機を迎え、今年こそは政治に「変」を求めながらも、その政治に多くを期待せず、他人に頼らなく、問題の責任を他人に転嫁しない。そして、何よりも、自己満足(自足)して生きていけるだけの知恵と工夫をするように自分自身が「変」化しなければならぬと思います。では、今年も良いお年を!





### 奇跡の命

廣野昌英

先日、下村嘉明さんから、死について何か書いてくれませんかとい依頼を受けました。芥川だよりという冊子が入っていました。面白く読みました。いいなあと思ったのは、立木理さんのお母さんの『私の人生は結局世を繋いだだけだったのかなあ』という言葉です。すごいと思いました。何億年も続いてきた私の“命”の伝統のただただリレーの一走者の役を果たしたということに尽きるのでしょうか。そんなはずはないと思う人が多いでしょうが、よく考えるとそれ以上でもそれ以下でもないのだろうと私は納得しています。

生とはなんぞやとか、死についてどう考えるかとか、いろいろ思いますが、結局そんな事はどうでもよいのかもしれないですね。

そんなにがんばって生きる事もないし、まして死ぬ必要も無いのでしよう。私たちは唯唯36億年続いている私のいのちを生きているだけだと短絡的に考えてはいけないのだろうか。

気がつけば私は自分で生きているのではなくたのでないか。勝手に

命あふれる地球は奇跡の惑星といわれる



自分で生きていると思っていたのは間違っていたのでは無いか。なぜこのよくな事を思ったかは昨年のことです。

昨年の年末に高校時代の同窓会で、淡路島へ行ったときのことです。奇跡の星の植物園”に立ち寄りまして・あまり珍しい植物があったわけではありませんが。唯そのネーミングがすごいなあと思つたのです。帰ってきて益々その感を強くしています。

この地球という奇跡の星で奇跡の命を生きている私はまさに奇跡の生き物といつてもいいのではないか。

そう理解していながら、本来ゼロである私がここまで生きてきた事を素直に喜ばなくてはいけないのでしょうか。御紙が益々発展されますよう願っています。

平成二十年 師走

### 『命』

私は自殺する作家やその作品は好きではない。

芥川龍之介、太宰治、川端康成、江藤淳ら。人に生きる喜びを与えねばならない仕事をしている者が、自ら死んでどうするのだ、と思うからだ。

心中ものや殺人もの嫌いだ。あまたの恋愛小説や推理小説。人の命を軽く扱い過ぎだと思うからだ。

病死ものも読みたくない。特に癌もの。身内に癌患者いる私には、その苦しみは、読まなくても分かる。

好きなのは、最期まで諦めない人。結核で寝たきりでも庭を眺めて俳句を詠み続けた正岡子規は良い。勇気と希望を貰える。(龍)



あなた心のつぶやきをお寄せください  
一八〇〜二五〇字くらいで

### 俳句

養女

- 落葉踏む カサコソ音や 衿たてる
- すすき群 凍てる月浴び 凜として
- 落葉樹 梢明るき 小路かな
- 笛吹いて自転車商い 十二月
- めずらしき ずっしり赤く 実南天



### 編集後記

新年明けましておめでとうございませう。本年もご支援のほど、よろしくお願ひ申しあげます。

今年世界の経済状況が大きく動く年になりそうです。経済の効率化や便利さを求めた結果、人間関係の稀薄化が進み「義理と人情」が消えてしまっています。

人間が部品のように扱われて企業の利潤追及のために利用されてきました。人の心が押し潰されそうです。こんな時代だからこそ平凡な日常の気持ちを集めて皆さんの心を繋いでいけたらなあと思つています。(嘉)

ゆれる頭の中で

満員電車に乗り、さて坐る場所はと物色中、「どうぞ」スーッと席を譲って下さった。

「ありがとうネ、助かりました」

ふと気がつくとき、すぐ脇に若い母親が立っている。乳母車の中には、肌の白いふっくらとした男の子、ねむそうな顔、一歳位かな。じっと目をすえて見ている。視線があつた。

笑うのか、泣くのか。やがて体を母親の側にそうように、両手を出して何かをいいたそうにする。母親は、全く無表情な顔でやたらと頭をなで、手をさわるだけ。要求の通わない子供は、とうとうむずかり出した。この親子はどこで降りるのか、気になりだした。まわりの人達も、あやしたり通路をあけて協力体制だ。にもかかわらず、あつという間の瞬間に子供を抱きあげ、さつさと降りてゆく。ありがとう、すみませんの笑顔ひとつ見せずにホームに立つ姿を見て、これもいらぬ年寄りのおせつかいか。こんな事で動揺するのも老いの自然の一部だろうか。

これまでの人生を振り返ってみると、つくづくなつかしく思うことがあります。

「地獄と極楽は紙一重なんだなあ」そして、あの世でなくてこの世にあるものだと。地獄、極楽が。誰もがこんな経験をするのではないだろうか。どうして私にだけ次から次へと振りかかってくるのかと、つい顔つきまで暗くなつて、人に物にあたつてしまします。

すると余計につらいことを招いていくような気がするので。もっと素直に明るく考えよう。思い切りよく、又一匹家族をふやそう。人間は不思議なもので、楽しいことを考えていると、だんだん陽気になつていくのです。そこで、安ペエー犬が仲間入り「キャン」の一声で「あー、よしよし」と家族の会話がつかつてゆくのです。そして、明るい笑顔も生まれてくるのです。

「山より大きな獅子は出ない」

「乗り越えられないような大きな問題や苦しみはない」

と考えるようにしたのです。

気持ちを切り替えることで、地獄のような苦しみが、ふっと軽くなつてそこに極楽が見出せるのだと思います。

外に出ると、たくさんの人に会い、

そういつた出会いを大切にしていると退屈することもなく話題も豊富になり、つながりは本当に大切だと身にしみ自分の宝物を見つけていきたいと思います。

回顧

『皇紀二五九九年』

ふるさと文集 一志会

昭和十四年三月二十六日卒業記念

「長期戦第三年目に入り、この歴史的な年に卒業される皆さんは健康に留意して、非常時国家の女性としてお役に立つよう自己修行に精進しなさい。それにつけても、何時も心の奥底にとめて置かなければならないことは「真実」ということです。このことを忘れては、決して真の幸福はもたらせません。(以下略)」

担任の先生のことばである。

学期末の寸暇をさいて、ガリ印刷

12月の芥川商店街の催し

☆☆☆☆

「芥川だより」から

1月5日(月) 10時より

『福久餅 ふくもち』

梵～ぼん～店頭にて

丹波の和知のお餅をぶくっと炭火で焼いて、和知のお袋が仕込んだ白味噌を挟んで食べていただく、『福久餅・ふくもち』です。

今年で3回目ですが、大変喜んでいただいています。どうぞ、お越しください。

用意した御餅が無くなり次第終了

りで生徒に書かせた作文集が配布された時の驚き、喜び。一人一人の表情が浮かび上がってくる。人生って不思議なもので、昭和の末期に西宮市在中の高木百合子さんと紙面で知り合い、「わいふ誌」の間入り。書くこと、論じ合うことで十年以上つづいたと思う。今はよき思い出となる。

八十路になつても書くことを忘れない。現在本棚を飾る「ふるさと文集」「わいふ誌」、いつかは抹消される日がくるけれど、尚わたしに呼びかける。「まだ、書くことあるの？」と。書くことによつて、自分の身のまわりが見え、身を守る盾とはなると思うけれど。

担任後記

身はたとへ海山遠く隔つとも永久に結びし心な忘れそ